

◇「北九州紀行」

[A]北九州の古代史 ⑨

[B]北九州探索計画 ⑩

[C]北九州探索記録 ⑪～⑭

[1]⑪第1日(5/19)みやま市～吉野ヶ里

[2]⑫第2日(5/20)大宰府～福岡

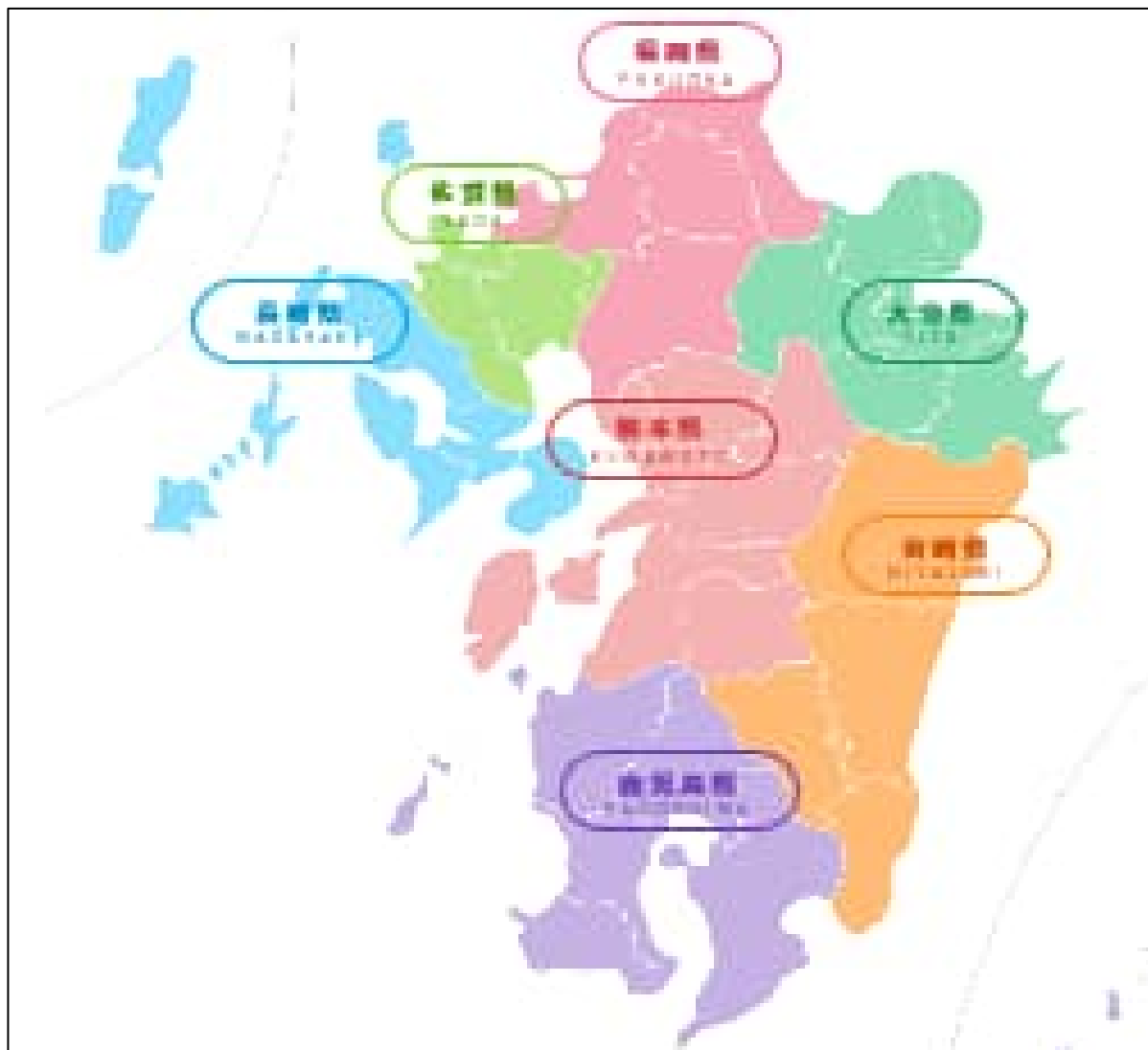
[3]⑬第3日(5/21)伊都国～唐津

[4]⑭第4日(5/22)福岡(宗像・銚崎)

[A]北九州の古代史

P25～P34

皆の広場 素人の歴探考⑨「北九州古代史」



(1)はじめに

紀元前後に弥生式農耕が広がってゆく段階で北九州は先進地域であり畿内政権にとっても特別な地域であった。

海の民

福岡県宗像郡玄海町の玄界灘に面した砂丘上にある鐘崎貝塚に縄文式土器を残した鐘崎海人は海へ出かけて1年間の大半を過ごすことが多かったようで対馬や壱岐の海人もこうした鐘崎海人から進出した人であると言う。さらにこの人達が海を越えて朝鮮半島に出かけて行ったということで鐘崎は縄文時代に既に壱岐対馬の原点であり、更に南朝鮮にも進出していたと言う。これと深く関連するものとして律令時代(767年)に宗像郡大領宗形朝臣深津がその妻竹生王と共に鐘崎船瀬を造った功で叙位に預かっているとの記録が残る。

志賀島の荒雄

725頃 遙か古代に志賀島あたりに海部(アマベ)が住み安曇氏を村長としていた。筑前国宗像郡に宗形部の津磨と言う高齢の漁師が住んでいた。律令制で大宰府から対馬に送る食料船を出すように津磨に指令があったが余りの高齢のため旧知で志賀の海部荒雄に代役を頼んだところ、快く引き受けて肥前松浦県の三井楽(遣唐船の発着場)へ官船の船頭として乗り込んだ。ところが玄界灘は荒れて彼の船が荒波のため難破して亡くなった悲劇の歌が万葉集に。

(2)縄文時代

縄文時代はBC10,000～BC300頃

BC10,000頃～BC300頃

縄文時代は便宜上、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と六区分考古学的な時代区分は旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代から、更に白鳳時代、奈良時代へと続く。江戸時代、既に日本各地の考古学遺物は既に記録されていたようですがモースが大森貝塚を発掘してから以降 町名の弥生、土器の紋様等により弥生式土器・縄文式土器とその時代の生活・文化と関連付けて整理されるようになった。

縄文人

倭人と言えば弥生時代人が起源だとする考えが根強いが、縄文時代のある時期から中国人たちは倭人と呼んでいたのではないかという意見が濃厚。日本列島で倭人の出現は旧石器時代にまで遡ると言われる。旧石器時代の遺跡は約3000ヶ所に上る。今までの歴史認識と異なり古代日本で、最近の知見では縄文後期には既に一部地域で水稻耕作(弥生時代から)が始まっていたと言われている。

縄文土器

第1次渡来人

北九州には縄文前期の土器として曾畑式と呼ばれる土器が有り、朝鮮半島の櫛目文様の土器と共通性が指摘されている。また縄文中期・後期に西北九州型と呼ばれる石器・釣針が朝鮮半島の油坂貝塚とか釜山市東三洞貝塚からも出土する事から九州縄文人と朝鮮半島との交流が見られる。福岡県宗像郡玄海町の玄界灘に面した砂丘上にある鐘崎貝塚に縄文式土器を残した鐘崎海人は海へ出かけて1年間の大半を過ごすことが多かったようで対馬や壱岐の海人もこうした鐘崎海人から進出した人であると言う。更にこの人達が海を越えて朝鮮半島に出かけて行ったという事で鐘崎は縄文時代に既に壱岐対馬の原点であり、更に南朝鮮にも進出していた。これと深く関連するものとして律令時代(767年)に

宗像郡大領宗形朝臣深津がその妻竹生王と共に鐘崎船瀬を造った功で叙位に預かっているとの記録が有る。

黒曜石

縄文早期・前期に既に土器や石器の運搬・交換が行われていたようです。日本の新石器時代の象徴である黒曜石の分布が海上交流を示してくれている。

国内交流

- 1) 隠岐の島四島のうち島後の五箇村久見、西郷町津井からは打製石器の黒曜石が産出しており、隠岐産の黒曜石は島根・鳥取・兵庫(丹後半島平) 福井(鳥浜遺跡)の日本海地方に丸木船で運搬されている。
- 2) 同じく太平洋側でも伊豆七島の黒曜石の産出は神津島、新島の2島であるが旧石器人・縄文人によって八丈島(倉輪遺跡・湯浜遺跡)・神奈川県相模原市(橋本遺跡)・東京都(武蔵台遺跡)等へもたらされていた。
- 3) 九州では熊本県、大分県、長崎県、鹿児島県で黒曜石を出土しているが大分県姫島のものは瀬戸内海沿岸地方でも利用されたことで古くから名高い。
- 4) 佐賀県伊万里市腰岳の黒曜石は朝鮮半島と西北九州の中間にある壱岐の郷ノ浦にある鐘ヶ崎遺跡で腰岳産の黒曜石と確認されている。更に朝鮮半島釜山の東三洞遺跡でも腰岳の黒曜石が検出されている。

大陸と交流

- 1) 朝鮮半島南端の釜山市にある東三洞貝塚は朝鮮半島の新石器時代の代表的な櫛目紋土器を主体とした遺跡であるが、この遺跡から九州縄文時代後期の鐘崎式土器と北久根山式土器を出土しており、縄文時代における北九州と朝鮮半島の交流が有った痕跡と言える。
- 2) また佐賀県伊万里市腰岳の黒曜石は釜山の東三洞貝塚から出土する黒曜石石器に使われていることは間違いないとのことである。

(3) 弥生時代BC300頃～AD300頃

弥生時代(BC300～AD300)は前期・中期・後期と大きく区分される。

1) 弥生時代の遺跡

弥生遺跡 古墳時代直前の弥生式後期に九州では甕棺墓・支石ドルム遺跡が多くみられる。弥生時代の始まりは、大陸文化の到来であり、具体的には水稻耕作、金属器、大陸系石器、支石墓などがあげられる。西北九州ではこれらの一部が縄文晩期後半から見られる。

水田遺跡 糸島地方の支石墓は朝鮮半島系であり、副葬品もそうであるから、その被葬者は朝鮮半島から来た渡来人又はその子孫ではないか。日本最古の水田遺跡が発掘された板付遺跡は福岡市博多区板付にある。この下層遺跡からは縄文晩期終末の凸帯文主体の夜臼式土器も検出される。水田1区画は500㎡(巾10m * 長さ50m)程度もあり、大陸系の石包丁などが出土している。縄文晩期から弥生時代にかけての大陸系石器・金属器・木製農機具があり、遺跡として玄界灘の一部に限定されて以下が有る。

- ・唐津市菜畑遺跡(大陸系の石器・装身具・木製品)
- ・糸島郡曲り田遺跡(住居跡と鉄器素材)
- ・福岡市有田遺跡(土製の紡錘車・大陸系石器・朝鮮半島の無文土器系)

支石墓 弥生初期の支石墓は西北九州と福岡平野に限定される。支石墓とは、朝鮮半島から西北九州にのみ分布する墓の一形式である。直径1～2mの大石を数個の塊石で支えた基盤形の埋葬

施設で、その構造は①箱型石棺、②素掘りの土壇、③礫床土壇、④合せ甕棺などがある。糸島半島の支石墓は素掘り土壇と礫床土壇が中心で朝鮮半島の副葬品が見られる。初期の大型支石墓で副葬品を持つ支石墓があるのは伊都国の所在地である糸島地方の前原市に限定される。

2) 石器遺跡

有柄磨製石器

朝鮮半島支石墓の副葬品の一つ、有柄磨製石器は北部九州・四国・大阪湾にまで分布し、その伝搬経路は対馬・壱岐経由で九州唐津・松浦地方に上陸して、糸島から2方向に東進伝搬している。伊都国の糸島からは、玄界灘沿岸を東進し遠賀川下流に集中。更に遠賀川から田川盆地・築前平野を経て四国北岸を東進して大阪湾まで伝搬。またもう一方は糸島から福岡平野の奴国朝倉から筑後平野北部へ分布し、その一部が大分県日田盆地まで達している。

3) 青銅器遺跡

第2次渡来人

日本に無文式土器をもたらした弥生時代第2次渡来人は青銅器工人の可能性が高い。

青銅器の鋳型

九州における青銅器武器の鋳型遺跡として、
(弥生中期前半)

・佐賀県千代田町姉遺跡……銅剣・銅戈の鋳型遺跡

・佐賀県大和町惣座遺跡……銅戈鋳型

奴国・志賀島勝馬遺跡……銅剣鋳型

奴国・春日市大谷遺跡……銅剣・銅戈・銅鐸鋳型・小形仿製鏡

銅鐸の鋳型・大分県宇佐市別府遺跡……朝鮮小銅鐸鋳型

弥生中期後期

・春日市大谷遺跡……朝鮮小銅鐸鋳型

・佐賀県鳥栖安永田遺跡……古段階銅鐸鋳型

・福岡市赤穂ノ浦遺跡……古段階銅鐸鋳型

弥生前期末

BC200頃

弥生時代初期に伝来した青銅器遺跡として玄界灘沿岸宗像郡津屋崎町の今川遺跡があり、銅鏃と銅製の鑿が出土している。弥生時代前期末(BC200頃)になって初めて銅剣・銅矛・銅戈が流入され、墳墓の副葬品となった。この時期には弥生早期の壺形土の流入と同じく朝鮮半島から新しい種類の「無文土器」が持ち込まれた。この時期の無文土器には「牛角把手」がついているのが特徴で板付遺跡に近い福岡市諸岡遺跡で最初に発見された。諸岡遺跡は奴国の中心に位置するが、筑後平野北側の小郷里市横隈遺跡でも出土している。

4) 原始墳墓

1. 金塊式甕棺墓(弥生中期初)

弥生時代前期末にもたらされた青銅武器は銅剣・銅矛・銅戈で弥生中期初頭(BC180頃)に墓に副葬されるようになった。この墓が北九州弥生人特有の「甕棺墓」で近海式と呼ばれる。韓国釜山市の金海貝塚で発見されたが甕棺形式の墓は逆に北九州から朝鮮半島へ流出したものと見られている。

2. 吉武高木遺跡

弥生中期初頭の青銅武器を埋葬した墓は春日市須玖岡本遺跡からも出土している。中でも福岡市吉武高木遺跡は多鈕細文鏡・青銅・銅剣・銅矛銅戈・勾玉など多数出土していることから「最古の王墓」ではと言われ伊都国と奴国の中間の早良平野にある。この時期北九州では唐津・糸島・早良・福岡・佐賀など各平野に

国らしきものが誕生しつつあった。

3. 最古の王墓

一般集団の墓に比べて規模の突出した「特定集団墓」が出現し

イ) 弥生中期中(BC108頃)

武器等の副葬品を保有する率が高く所謂「三種の神器」を埋葬した甕棺墓にかわり木棺豪族墓が出現した。

・吉武高木遺跡、板付田端遺跡、宇木汲田遺跡、須玖岡本遺跡等

ロ) BC1世紀～AD1世紀

この当時日本の先進地域であった北九州でさえまだ地方部族共同体であった。古墳時代直前の弥生式後期に九州では甕棺墓・支石ドルメン遺跡が多くみられる。甕棺遺跡(銅剣、銅戈、甕棺、鏡、勾玉、管玉)

甕棺墓 甕棺、箱式石棺、ドルメンなどの原始墳墓も福岡を中心にした文化圏の中にある。福岡全域には今山で造られた玄武岩の磨製石斧、飯塚し立岩産の石包丁がある。弥生式二大文化圏である銅剣・銅鉾文化圏のうち銅鉾と銅戈が広がって分布。奴国の支配層らしく魏志に伝わる。

伊都国 甕棺遺跡(銅剣、銅戈、甕棺、鏡、勾玉、管玉)

筑前国怡土郡の三雲遺跡・井原遺跡

筑前郡 甕棺墓、ドルメン支石墓: 銅利器・ガラス玉・鏡

筑紫郡春日村の須玖遺跡、

末蘆国 甕棺墓(鏡・鉄刀片、銅釧)

現在の唐津桜馬場

ハ) 弥生中期後半

怡土郡三雲村南小路遺跡は大型甕棺墓で鏡の数は57面、棺を埋

王墓の出現 葬する墓壇の大きさも弥生時代の最大規模で約30m四方の墓域を有し「伊都国の王墓」と推定される。

(三雲南小路) 同じく「奴国の王墓」は福岡平野の南に位置する須玖岡本遺跡の支石墓で石の大きさは長さ3.3M*巾1.8m * 高さ0.3mで30面大型鏡・武器等多数出土している。

ところが両方とも青銅武器型祭器を持つが鉄器は存在しないことは王が祭祀権を掌握していた事を示しているのかも知れない。

二) 鉄文化伝来

鉄器墳墓 弥生時代北九州ではじめての鉄器の出土する墳墓として福岡県飯(立岩堀田)塚市の立岩堀田遺跡10号墳は日本製の銅戈と鉄剣が共存する。

(4) 小国家分立時代(地地方小国家)

○ 魏志倭人伝

① 末蘆国

九州の玄関口として交流の窓口の国力を充分保持していた。

壱岐から海を千余里渡り日本列島の上陸地点が末蘆国である。

「四千戸余りで山海に沿って暮らしている。人が見えないほど草木が生い茂り、人々は潜水して魚類やアワビをとる」と記載されている。末蘆国は現在の唐津市で久里双水古墳からは日本で珍しい舟葬の跡も発見されており、海人として生活していた事が分かる。

唐津では縄文晩期の水田遺構も発見されている。

近年の調査で末蘆国には国内を統一した強力な王が存在していて二代続いていた可能性が示されている。

② 伊都国

福岡県西部の糸島市に比定されている。

魏志倭人伝では末蘆国から東南へ五百里の地点と記載されており、「戸数千余戸で、代々王位が継承されている。女王国に属し使者は一旦ここに留まる」と魏志倭人伝に記載されている。

帯方郡からの魏使が最初に倭を訪問する場所であり、一大率と言う観察官が常駐していた。交易と物造りとして石斧・塩・勾玉を加工し

大陸からは銅鏡などを入手し分配した。
糸島市内にある三雲南小路・井原鍵溝・平原の三王墓からは中国製の銅鏡が出土し、平原遺跡からは日本最大級の内行花文鏡・直径46.5φが出土している。また楽浪郡の風習の伝来したものとして夫婦合葬の墓も見られ大陸と交流の窓口である事を窺わせる。

③奴国

現在の福岡市春日市

伊都国から東南百里進むと奴国があり、AD57年に後漢の光武帝から「漢委奴国王」の金印を授与され、これまでの登場国より遙かに大規模の戸数2万戸の集落とされている。奴国も弥生時代の農業に不向きな土地で青銅器・ガラスなどの生産と交易で発展したと言える。春日市の須玖遺跡からは多くの工房跡が発見されている。当時の青銅器として広形銅矛・鏡・銅鐸・鋤、筒状銅製品、鉄器、ガラス等の工房跡が見つかった。

○後漢書

范曄

奴国

後漢書の撰者は范曄

東夷伝・倭の条(奴国=筑前国那珂郡伊都国=怡土郡)

「建武中元二年(57年)、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。倭人自ら大夫と称す。」倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす。

1世紀の半ば博多湾岸の奴国王が後漢「光武帝」に朝貢して金印紫綬を賜う。1～2世紀頃の奴国はのちに筑前国那珂郡となり伊都国辺りは怡土郡となり、末盧国は肥前国松浦郡となった。

倭奴国王

金印紫綬

(57年)

1784年3月23日：福岡志賀島で「倭奴国王・金印紫綬」を発見により「倭奴国」が倭の奴国であることがはっきりした。

奴国王が「奉貢朝賀」して後漢の光武帝から金印紫綬を賜わる。
※奴国王が賜った金印の鈕(チュウ)が蛇をかたどっているのは漢が日本を蝦夷と見たからであるがその質が金であるのは匈奴以外では異例であるとのこと。

④不弥国

候補地は福岡県糟屋郡宇美町から宗像にかけての一体と言う説が有る。奴国から東100キロで不弥国であるが、以降の国は「魏志倭人伝」の記述が曖昧で不弥国も千戸と言う小規模集落でその実態はよく解らない。それらしい遺跡として飯塚市の立岩遺跡があり王墓王妃の墓、青銅器、鉄器など出土しているが不弥国の位置は明確でない。

⑤投馬国

投馬国は不弥国の次に登場する。「南、投馬国に至る、水行二十十日」とあるが、この記事が投馬国への全てで邪馬台国の7万戸に次ぐ5万戸の大規模であるが実態は解らない。これ以降旅程の記載方法が異なこれ以降旅程の記載方法が異なっており、移動は距離でなく所要日数に変わっている。次の邪馬台国に至る「水行十日・陸行一月」の記載から畿内説では投馬国は広島県の鞆とか出雲説もある。九州説でもこの旅程記事から比定地として日向、薩摩、肥後説がある。

(5)倭国時代(仮称)

⑥邪馬台国

次の邪馬台国の位置も不詳である。

邪馬台国に至る「水行十日・陸行一月」の記載は論争の種。

⑦二十一国

「魏志倭人伝」では邪馬台国の後に実態不明の21国が記載されている。「斯馬国・己百支国・伊邪国・都支国・・・躬臣国・巴利国・支惟国・・・奴国」

⑧狗奴国

最後に邪馬台国の敵対国として狗奴国が記載されている。狗奴国については九州肥後国球磨郡の熊襲説が有力だが紀伊の国熊野

- 説や肥後国菊池郡城野説、尾張国、遠くは氣野国説まである。
- 後漢書 倭国王朝貢
(107年) 後漢の安帝の永初元年の倭国王の使者が洛陽を訪れた。
中国、正史上3番目の倭人関係の記事で57年は「奉貢朝賀して金印紫綬」2番目は「歳時を以って来献見」で今回の永初元年は軽く「願請見」扱い。生口160人を献じたことも始めてである。
「冬十月、倭国、使を遣わし奉献す」(後漢書・安帝紀)
「永初元年、倭国王師升等、生口160人を献じ、願いて見えん事を請う」(後漢書・東夷伝)

倭国大乱(160年～180年)?

- 梁書 「漢の靈帝、光和(178～183)中倭国乱れて相攻伐する事暦年、乃ち共に一女子卑弥呼を立て、王と為す。弥呼夫婿なし。鬼道を挟みて能く衆を惑わす。故に国人これを立つ。」
- 北魏字碑 170年頃の中国北魏の曹氏系の墓・元宝坑村1号古墳から出土した字碑「有倭人以時盟不」(倭人が時を以って盟することがあるか)倭国大乱を収束させることは漢朝にとっても容易な事ではないが中国に古くからある結盟と言う手段で魏が調停に当たったと考えられる
東大寺山古墳(180年頃)
奈良県天理市にある東大寺山古墳(4C末築造)は忠平銘の鉄刀が出土しており周囲に2重の環濠が掘られ周辺には奈良では珍しい高地性集落跡が残り2世紀頃の倭国大乱の有力な資料とされている。忠平は後漢の靈帝(184～189)の年号である。
- 三国志(3世紀後半)
三国志の世界は魏・呉・蜀三国の対立時代で、特に魏と呉は中国東部海岸に面した南北で南北朝時代の地域的対立へと引き継がれる。魏はアワ、ムギの栽培地域で呉は水稻栽培地域で夫々日本へ伝搬し急速な勢いで西日本から東日本へと水稻栽培が広まった。

(6)邪馬台国連合時代

1)魏志「倭人伝」

- 239年頃 魏志倭人伝に描かれた時代は中国では後漢の終わり(AD2)頃である。女王卑弥呼を盟主とする邪馬台国連合について
三国志倭人伝は;
「其の国、本亦、男子を以て王と為し、住まること七、八十年、倭国乱れ相攻伐すること暦年、乃ち共に一女子を立て、王と為す。名づけて卑弥呼と曰う。鬼道を事とし、能く衆を惑わす。
後漢書
江戸時代後期の菅政友(1824～1897)によれば魏志倭人伝と同じ記事が後漢書では倭国大乱と卑弥呼の誕生経緯として以下の記事がある;「高霊の間、倭国大いに乱れ、こもごも相攻伐し、暦年主なし。一女子有り、名を卑弥呼と曰う。年長じて嫁せず、鬼神の道を事とし、能く妖を以って衆を惑はす。是に於いて、共に立て、王と為す。」

2)卑弥呼登場

卑弥呼(178～247)?

1. 卑弥呼 景初3年(239)卑弥呼の魏へ遣使は倭国大乱後初の正式外交
・107年の朝貢から卑弥呼が遣使するまで倭国大乱時代の130年どの長期間のブランクがあった。
・卑弥呼は大夫の難升米ナシを帯方郡に派遣して十人の生口と二匹二丈の班布を献上したので、明帝は「親魏倭王」の称号と「金印紫綬」と鏡、刀剣、金、真珠、鉛丹を授けた。

「汝が有るところ、遙かに遠きも、乃ち使いを遣わして貢献す。
是れ汝の忠孝、我甚だ汝を哀れむ」
「汝、それ種人を綏撫し、勉めて孝順をなせ、・・還り到らば録受し、
悉く以て汝が国中の人に示し、国家、汝を哀れむを知らしむべし」

2. 魏へ朝貢

(243年) 卑弥呼は難升米らを洛陽に送ったあとも243年に伊声耆等8人を派遣。その後邪馬台国と倭奴国の間で戦乱がはじまり 魏へ援助を求めた。魏の朝廷は卑弥呼の大官、難升米に詔と黄幢を賜うと帯方郡に送ってきたが帯方郡は混戦中で247年になって倭人に告諭された。卑弥呼はこの戦いの最中に亡くなり、直径100余歩、奴婢百余人が生き埋めの大きな塚が作られた。

3. 晋へ貢献

壹与 卑弥呼が死ぬと男王を立てたが邪馬台国連合内部で戦闘が始まり
(266年) 250年前後に13歳の少女、壹与が女王と成りようやく鎮静化して
266年に生口30人と絹織物その他を以って魏のあと晋に貢献した。

4. 倭人伝と北九州

北九州は朝鮮半島に近く真っ先に大陸文化の洗礼を受けた。
魏志倭人伝に登場する北九州の国々としては対馬国・壱岐・末羅・伊都・奴国がある。

5. 卑弥呼没

卑弥呼の没後、倭国は荒れ、一時男王が立つが千人もの死者を出す大規模な内乱が起きている。
そこで、諸国が集まり、二代目卑弥呼として十三歳の少女・台与を女王にする事で決着した。

3) 台与(とよ)

魏志倭人伝によれば;

魏 卑弥呼没後に再び倭国に内乱が起こり、十三歳の台与が女王となる。台与も魏に朝貢して奴隸30人、真珠5千個等を献上した。
当時の献上品は麻織物・玉石・生口などで、後漢からは絹織物・金・銅鏡等高級品が下賜された。

晋 台与は晋王朝が誕生した翌年266年に司馬炎に朝貢した。
266年 316年に晋が滅ぶと倭国連合も戦乱時代へ突入し、倭の五王時代まで、暫く中国の史書に現れなくなる。

○三国志 3世紀後半

三国志の世界は魏・呉・蜀三国の対立時代で、特に魏と呉は中国東部海岸に面した南北で南北朝時代の地域的対立へと引き継がれる。魏はアワ、ムギの栽培地域で呉は水稻栽培地域で夫々日本へ伝搬し急速な勢いで西日本から東日本へと水稻栽培が広まった。

○魏志倭人伝

239年頃 魏志倭人伝に描かれた時代は中国では後漢の終わり(AD2)頃である。女王卑弥呼を盟主とする邪馬台国連合について
三国志倭人伝は;
「其の国、本亦、男子を以て王と為し、住まること七、八十年、倭国乱れ相攻伐すること暦年、乃ち共に一女子を立て、王と為す。名づけて卑弥呼と曰う。鬼道を事とし、能く衆を惑わす。」

○後漢書

江戸時代後期の菅政友(1824～1897)によれば魏志倭人伝と同じ記事が後漢書では倭国大乱と卑弥呼の誕生経緯として以下の記事がある;

「高霊の間、倭国大いに乱れ、こもごも相攻伐し、暦年主なし。一女子有り、名を卑弥呼と曰う。年長じて嫁せず、鬼神の道を事とし、能く妖を以って 衆を惑はす。是に於いて、共に立て、王と為す。」

○梁書 「漢の靈帝、光和(178～183)中倭国乱れて相攻伐する事暦年、乃ち共に一女子卑弥呼を立て、王と為す。弥呼夫婿なし。鬼道を挟みて能く衆を惑わす。故に国人これを立つ。」

3)卑弥呼と邪馬台国

1. 卑弥呼登場(178~247)

卑弥呼 景初3年(239)卑弥呼の魏遣使は倭国大乱後初めての正式外交。
・107年の朝貢から卑弥呼が遣使するまで倭国大乱時代の130年ほどの長期間のブランクがあった。
・卑弥呼は大夫の難升米ナシミを帯方郡に派遣して、十人の生口と二匹二丈の班布を献上したので、明帝は「親魏倭王」の称号と「金印紫綬」と鏡、刀剣、金、真珠、鉛丹を授けた。
「汝が有るところ、遙かに遠きも、乃ち使いを遣わして貢献す。是れ汝の忠孝、我甚だ汝を哀れむ」
「汝、それ種人を綏撫し、勉めて孝順をなせ、・還り到らば録受し、悉く以て汝が国中の人に示し国家、汝を哀れむを知らしむべし」

魏へ貢献

(243年) 卑弥呼は難升米らを洛陽に送ったあとも243年に伊声耆等8人を派遣。その後、邪馬台国と倭奴国の間で戦乱がはじまり 魏へ援助を求めた。
245年 魏の朝廷は卑弥呼の大官、難升米に詔と黄幢を賜うと帯方郡に送ってきたが帯方郡は混戦中で247年になって倭人に告諭された。
247年 卑弥呼はこの戦いの最中に亡くなり、直径100余歩、奴婢百余人が生き埋めの大きな塚が作られた。

晋へ貢献

壹与 卑弥呼が死ぬと男王を立てたが邪馬台国連合内部で戦闘が始まり250年前後に13歳の少女、壹与が女王と成りようやく鎮静化して266年に生口30人と絹織物その他を以って魏のあと晋に貢献した。

2. 台与(とよ)

卑弥呼没 卑弥呼の没後、倭国は荒れ、一時男王が立つが千人もの死者を出す大規模な内乱が起きている。
そこで、諸国が集まり、二代目卑弥呼として十三歳の少女・台与を女王にする事で決着した。
魏志倭人伝によれば;
魏 卑弥呼没後に再び倭国に内乱が起こり、十三歳の台与が女王となる。台与も魏に朝貢して奴隸30人、真珠5千個等を献上した。当時の献上品は麻織物・玉石・生口などで、後漢からは絹織物・金・銅鏡等高級品が下賜された。
晋 台与は晋王朝が誕生した翌年266年に司馬炎に朝貢した。
266年 316年に晋が滅ぶと倭国連合も戦乱時代へ突入し、倭の五王時代まで、暫く中国の史書に現れなくなる。

(7)邪馬台国論争

1)はじめに

邪馬台国連合の所在地については畿内倭説と九州説が対立して決着を見ていない。
倭人伝の記事のままで、邪馬台国は大和でもなく、九州でもなく、遙かに遠く太平洋のど真中の海中になってしまう。
そこで色々な解釈で両者の論争が始まった。
3世紀の編者は多分、帯方郡の使者の報告をもとに記載した為に魏志倭人伝に記載された当時の各国までの距離と方角の情報が辻褄が合わない。
・5世紀頃には畿内勢力がほぼ日本全土を統一していたので随書でも「倭国は耶麻堆に都す。乃ち魏志の所謂邪馬台なる者なり」
・日本書紀の編者は卑弥呼を神功皇后に見たて為に神功皇后の生存年代を百年以上も遡って卑弥呼の時代に合わせている。
・畿内説: 松下見林、新井白石、
・九州説: 本居宣長、近藤芳樹、
邪馬台国東遷説

仮に神武東征のように九州からヤマトへの移動があったとすると;
貿易の中継点
なぜ対馬を中心とする海の民(安曇氏)が大陸との交易に便利な
北九州からヤマトへ軸足を移したか。要因として二つ挙げるとすると;
倭人伝と北九州
北九州は朝鮮半島に近く真先に大陸文化の洗礼を受けた。
魏志倭人伝に登場する北九州の国々としては対馬国・壹岐・末羅・
伊都・奴国がある。

2) 関悠二の推測

第一は「鉄の市場開拓」として、鉄器を北部九州だけで独占するよりも鉄等の売りさばき相手として「東国との流通ルート」を確保したかった。対馬からみると北九州の奴国、伊都国は大陸貿易の中継点として重要であったかも知れない。
第二はヤマトの日田への進出問題
九州の邪馬台国の場所として、大宰府でもなく、吉野ヶ里でもないとした場合、大分県日田あたり(小迫辻春遺跡)ではないかと関悠二氏が言う。そして出土した土器が殆ど「畿内の土器」であったことから、畿内の纏向が日田を攻略したのではないかと推測。

3) 吉野ヶ里遺跡

九州説 佐賀県神埼市吉野ヶ里町(縄文時代～弥生時代～古墳時代まで遺跡)1980年代に大規模工業団地の建設が立案され事前調査が始まったがとてつもない遺跡である事が判明して平成元年(1989)には国営歴史公園として動き出した。この立地は筑後川両岸に佐賀平野が広がり東西を流れる2本の川を下れば筑後川に出て有明海に直通している。弥生時代初頭に遺跡南部には南北250mの楕円型環濠集落が萌芽として認められている。更に弥生時代前期前半には北側に2.5ヘクタールの環濠集落が出現しており、竪穴住居や甕棺墓・土壇墓・木棺墓跡が残り、青銅器の鑄造跡も見られてかなり早く青銅器の生産が始まっていたようである。中期に入ると推定20ヘクタールと相当大規模になってくる。後期の吉野ヶ里は更に発展して40ヘクタールを超す大集落に発展している。
吉野ヶ里集落の特徴として、農耕の痕跡が見られず、絹製品が多く発掘されたり、青銅器の生産が行われていたようである。水運の地の利が良い所から「交易国家」で50棟もの倉庫群の跡も穀物倉ではなく手工業と交易品の貯蔵庫ではないかとの説もある。

4) 小迫辻春遺跡(大分県日田)

弥生時代末から古墳時代にかけての遺跡。
1983年大分自動車道建設に先立ち「弥生式土器の良く出るところ」として調査が開始されたが1988年古墳時代初期の四角形の濠をめぐらせた居館遺構が二基発見された。その後の調査で三つの環濠と八十軒の竪穴住居跡と数棟の掘立柱建物、日本の条溝が見つかった。これ等は邪馬台国とヤマト建国の時代に相当する。また小迫辻春遺跡から出土する土器が畿内と山陰産が殆ど。
一、二号の環濠の内外は庄内式古段階の竪穴住居跡が見られる三期は布留式土器段階に相当する。
・Ⅰ期: 庄内式土器(3c～3.5c)1号環濠、竪穴式住居跡
・Ⅱ期: 庄内式新段階1号～2号環濠
・Ⅲ期: 布留式土器(3.5c～4c)2号～3号環濠
・Ⅳ期: 布留式土器(無くなる)

5) 纏向遺跡

(畿内説) 奈良で纏向遺跡が発見されてから俄然畿内説が元気になってきた。なぜなら纏向遺跡の出現は三世紀初頭であり、ヤマト朝廷誕生を意味する前方後円墳の出現も三世紀の事であるから邪馬台国の時代と纏向とが重なるから。